

3. どのような対応・支援を不十分／不適切と感じたか

インタビュー協力者の語りには適切だった支援が挙げられた一方で、不十分あるいは不適切だったとみられる対応や支援、二次被害についての発言もありました。不適切だと感じる点は個別性の高い面がありますが、被害者の視線からどのような対応、支援が求められるかを検討するヒントにしたいと思います。

【警察における不十分な対応】

✓ 当時警察の遺体安置所はお粗末で、対応も不適切だった

夫を傷害致死で亡くされた方は、警察署で遺体に対面した時のこと、その際の警察の対応、自責感をもつことになった経緯についてつぎのように語っています。被害直後にかかわるのは警察であり、その配慮は非常に重要で適切な対応が求められます。

「〇〇警察に遺体が運び込まれたときに、私が最初面会したんですけれども、ほんとに今はどうなってるかわかりませんが、コンクリートの上にブルーシート１枚敷いて、そこにただ、１２月なんて、寒い中に寝かされて、上に何か白い布だけがかぶられていて、場違いに線香立てと、ちん（おりん）だけ置いてあったんですけれども。娘たちが着いたら刑事さんに呼ばれて「奥さん、こんな場所で思春期のお嬢さんたち会わせたら、心の傷にならないですかね」って刑事さんから私に相談されたんです。「えー、今、私に決めさせる？」って思ったんですけど、しょうがないので刑事さんに「そうですよね。この場所、あまりにひどいですよね。分かりました。じゃ、娘たちには検死があるから、警察の都合で合わせられないって私が言います」って言って、娘たちに会わせませんでした。」

「遺体は葬儀の会社が警察まで運んで、警察署に安置してありました。その後司法解剖にも回すことになるので、会えるのは何日後ですと言われて。とにかく帰れというか、いたければ待合にずっといればいいけど、ただ、そこに座ってるだけですって言われ、娘たちと深夜タクシーで家に戻りました。ました。でも、実は後になって「私ってほんとに冷たいよな、あれで、夫を置いて帰って来ちゃったんだから」と思って、すごく自分を責めることになったんです。でも、なんかそのときはもう帰るしかないかなと思って帰ってきました。警察は、同情はしてくれてるんですけど、「ちゃんと調べますよ」とかは言ってくれてるんですけど。おおよそ被害者の家族を支援しようみたいなのは、今、考えると全くなかったですね。」(P2)

✓ 警察の説明不足

娘を殺害された方は、警察の捜査や犯人逮捕についての説明が不十分だったことについて、つぎのように語っています。20年ほど前の事件で、現在警察の対応は改善しているかもしれませんが、遺族の心理的負担に配慮すれば、質問の意図を明確に伝えることや適切な情報提供は必須です。

「事件から翌日まではそんな感じで、それから毎日のように、家に送ってくれた刑事が２人、所轄の警察官と県警の捜査本部の刑事、毎日うちに来て、いろんなことを聞かれる。例えばおととい夕ご飯に食べたおかずは何ですかとか聞かれるんだけど、全然そんなの覚えてないんですよ。人間の記憶ってこんなにあやふやかなって思うぐらいに。もしかしたら（記憶が）飛んじゃってたんだと思うんですけども、それを一生懸命思い出して答えると。捜査の状況どうですかと言うと、「いや、なかなかね」という感じで、捜査の状況はまったく教えてくれない。当時は警察

にも被害者支援なんていう認識はほとんどなかったんでしょうけど。ですから、私たちはほんとに何も教えてもらえず、こっちは全てもう、できるだけ捜査のためにという思いで伝えるというかたちで、それがずっと続いて・・・」

「加害者は(事件から)3年後に逮捕されたんですよ。それが、僕、仕事してて、妻から電話が。ちょうどお昼食べようかって言ってる時に電話があつて。(中略)・・・家に帰ったら警察官が5~6人、妻を中心に座ってて。僕が行ったら、ご主人、犯人は逮捕しましたって偉そうに言ってるんですけども、それは決して警察の手柄じゃなくて。第一報も警察は、犯人逮捕したら、いの一番に〇〇さんに連絡しますからって言ってたのが、その連絡は新聞記者からだったということで、そういう情報の管理ってどうなってるのかなって、ほんとに思いましたけどね。」(P1)

【刑事手続きにおける不十分な対応】

被害者遺族にとって、事件直後から裁判までの刑事司法手続のさまざまな場面で、負担感や失望感を抱くことが多いようです。遺族の声を以下にまとめます。改善するにはどのようなことが必要か示されています。

✓ 警察の事情聴取は長時間で苦痛も大きかった

「(被害直後の警察の事情聴取について)・・・犯人が現行犯逮捕なので、取り調べといってもきっと少なかったほうだと思うんです。ただ「奥さんもお忙しいでしょうから、何回も来るのは大変でしょうから、1回で済ませます」って言って、午前10時に行って、お昼食せずに午後4時までかかりました。」(P2)

✓ 担当検事の異動が知らされなかった

「最初の検事さん、とっても信頼できるなと思ったら「3月になったら異動で代わりますから」「は？」みたいな。(中略)・・・弁護士さんからそういう話をお聞きできる人もいるのですが、私は全く寝耳に水だったのでびっくりしました。」(P2)

✓ 公判でトラウマ体験が再現されるようだった

加害者が複数いたので裁判も複数あり、事件内容を何度も聞かされるのがつらかったと語る遺族の方もいます。遺族の立場に寄り添った、公判における配慮がほしいところです。

「とってもしんどかったです。何かさっき言った、この防犯カメラの映像とかが何回も何回も流れてくるので。それにプラス、目撃者の方とかも。で、その裁判が2つ、公判分かれたんで、2回、同じような話を全部聞くわけです。なので、もう頭の中で再現ドラマができるような感じです。」(P3)

✓ 公判での意見陳述について、説明不足で一人でやるしかなかった

「(意見陳述は)負担でした。1年に及んだ裁判の意見陳述は最後のほうなので、私は仕事しながらうちに帰って、「これ、ちょっとやり切れないかもしれないな」と思いながら準備しました。」

「意見陳述はとにかく遺族の気持ちを述べる場所だなということは分かりましたけれども、これがどういう意味があつて、だから、「こういう気持ちがあるなら、そこで言っておいたほうがいいですよ」とかのアドバイスがあつたほうがよかったなと思います。」(P2)

✓ 公判での被害者参加制度を利用したが、心情部分はきけなかった

「質問に関しては、どう……。心情部分とかってというのは、全部遮られるというか、事実関係にしか質問させてもらえなかったの。事実関係って、ほとんどその目撃者とか防犯カメラで明らかになってるんで、「じゃあ何を聞けんの？」っていうところで、ほとんど何も聞けなかった感じがすかね。」(P3)

✓ 傷害致死事件になったことについて検察の説明不足と判決に対する不満

「罪名が判決に影響することを全く知りませんでした。本当に知識がないので、検事さんにしてみれば「遺族には傷害致死事件ですよと説明したよ」と思ってらっしゃるかもしれないんですけども。全く分からなかったです。」
「(判決について)何年だったら満足できるのかは難しいですが、故意に人を殺して10年にも満たないのかって思いました。」(P2)

✓ 弁護士は遺族の気持ちや体調に配慮が足りなかった

「(弁護士について)被害者の人の気持ち、遺族の気持ちとかってというのは、全く分かってない感じでした。」「やっぱり精神的にいろいろ、PTSDとか抱えて、その大変さっていうのが全く分かってなかったんで。」「打ち合わせに行くのも結構大変な状況なんですけど、そういうのも分かってくれない。行って、「今日は何しに来たんやろ」っていうような…結構あったかな。」(P3)

✓ 被害者通知制度の利用は満足しなかった

「(被害者通知制度は)ないよりは、全然あったほうがいいんですけど、実際に気持ちの部分とかで、どうなんやろってというか、(加害者が)どう変わっていったのかっていうのも分かんないですし。」(P3)

【センターにおける不十分な支援】

センターの支援について、不十分さや不適切さを感じた遺族の声を以下にまとめます。生活支援については、近年ようやくその必要性が着目されるようになりましたが、自治体と連携してどのようなサービスを犯罪被害者に対して提供できるか整備しておく必要があります。

✓ センターのメニューに生活支援はなかった

「私が分かんないじゃないですか、こんなことに巻き込まれるなんて初めての経験だし。で、(センターに)行った時に、最初の面接の時に、「支援していただけるっていうんだけど、どういう支援があるんですか」って聞いたら、「いや、あなたが『こういう支援をしてほしい』って言ってもらわないと、こちらは支援できません」っていう感じだったんですよ。だからそもそも、自分は何に困ってるのかとか、何をしてもらいたいのかとか、それがあって初めて支援しますよみたいな感じだったから。いや、困ってるっていても、もう裁判も忙しいし育児も忙しいし。で、困ってるって言って、夜泣きする赤ちゃんをあやしに来てくれるんですかみたいな。だから仕事に行ってる間、子どもの面倒見てもらえますかとか。」
「あとはやっぱり困ったのは、例えば仕事が休みの日は、母は来なかったんで私が子どもの面倒見てたんですけども。何か病院行きたいとか、美容院にも行きたいな、髪切りたいなとか。仕事が休みの日しかできないことってあるんですけど、そういうとき母は母で実家のことが1週間分たまっちゃってるので。また母に迷惑掛けるわけにもいかないしっていうのがあって。それで、保育園の一時保育を2時間だけとか、そういうのは利用して

ましたね。病院行くときとかも、そういうところが、ちゃんと充実、支援があればいいと思うんですけど。ただ、支援センターも土日休みで 9 時 5 時の仕事なので（むずかしい）。」（P4）

✓ センターに電話して自助グループのことを尋ねたが、素っ気ない対応だった

「（事件後 2 年たったときにセンターに）…電話したんです。「こういう被害にあった者なんですけど、自助グループに参加したいなと思って。やっているんでしょうか」って言ったら「自助グループは毎週〇曜日の午後だけです、月に 1 回。それに、今いっぱいです」って言われて。」（P2）

✓ センターにおけるカウンセラーへの情報不足

「そのカウンセリングを〇〇センターで受けた時に、私は子どもの相談をしたっていうことでこの先生に来ていただいて、1 時間っていう時間の面接をセッティングしていただいたんですけども。その来られた先生が、私がどういう事件の遺族なのかというのを知らずに来てたんです。「どういう事件だったんですか」から始まって。（事件について）説明している間にもう 1 時間終わったんです。で、先生が「もう 1 時間たったので、きょうはこれで」って言うから、「え?」と思って。「私、子どもの相談で来たんですけど、子どもの話、してませんよね」って言ったら、「じゃあ次回、一回カウンセリングの予定組めますか」って言われたんです。「ああ、もういいや、この先生」と思って、「もういいです」って断ったんです。」（P4）

【医療費についての情報不足】

この方は、事件後 PTSD 症状が出るようになり、親の助言で病院に行くようになりますが、医療費のことで不安を抱えます。精神科にかかった場合、自立支援医療（精神通院医療）についての情報を早めに提供する必要があります。

「親に、医者に行ったほうがいいっていうのも、それ、事件直後ぐらいから、やっぱり全然眠れてなかったんで、それは言われて。行って、会ってると、どんどんと…。でも、その自分でおかしいっていうのは、あんまり分からないですね。で、いろんなところでフラッシュバックとか、やっぱり起こすことがちょいちょいあったので、人混みとかが、すごい怖かったですし…」 「（店を始めたばかりで）貯金がめちゃくちゃあったわけではないので、自転車操業というか、そんな感じで、一番すごい困ったというか、大変というか、医療費ですね。やっぱり PTSD になって、医者に行くんですけど、どんどん薬が増えていくんですけど、こうね。お医者さんは何も考えずにというか、ぼんぼん出してくれるんですけど、それが幾らになるのかっていうのが分からないというか、払う段階まで。やっぱり、それは結構きつかったです。」 「（心配だったことの）一番は医療費になります。自立支援制度とかっていうのがあるのを知ったのも、やっぱりその PTSD の治療をやる段になって、ようやくお医者さんから教えてもらったっていう感じだったんで。それをもっと早く知ってれば、こんなに薬のことで、お金で頭悩まさなくて済んだなっていうのはあります。」（P3）

【マスコミによる被害】

つぎは、マスコミの取材による二次被害の体験が語られています。とくにマスコミには、事件直後から長期にわたる被害者遺族の苦境についての理解と配慮が求められます。

✓ 遺族の状況を見殺しにしたマスコミの取材

「(事件後)ほんとに何が起きたか分からないてんやわんやの状態っていうことですね。マスコミは非常に失礼なやつもいて、「お宅、娘さん 2 人いますよね。どちらが殺害されたんですか」って電話で聞いてきたり、玄関ドア開けたら目の前に……。 (中略) 大体は門扉の外のインターホンを鳴らすんですけども、中にはもうドア開けたら(記者が)目の前に立ってたとか。冗談じゃない。とにかく出てってくれっていうことで、もうそんな取材なんか受けてる状態じゃないからっていうことでずっとお断りしてたというかたちで。」(P1)

「マスコミの方に尾行されたりとかっていうこともあったので。…その意図がよく分からないっていうので、逆に気持ち悪い。(事件後マスコミの追跡は)その起訴されるまでとか、あと、その事件のあった年末とかですよね。…あと、そうですね。ちょっと時間がたってから、「ちょっと取材させてください」っていうのが、結構ありましたし。」(P3)

✓ 過剰なマスコミ報道による弊害

「(マスコミの人が押し掛けてきたことが)ありました。1 週間か 2 週間ぐらいしてから、ちょっと申し入れをして「控えてください」っていうのがあるまで、割と夜遅くまで、インターホン鳴らされたりとかっていうのがありました。そうですね。一番しんどかったのが、結局マスコミに報道されてしまったので、夫の国の人たちが、「保険金が多額に出るんじゃないか」とかっていうことを個人的に問い合わせてきたりもあったし、(中略)…結構そこは、精神的にはきつかったです。」(P3)

【周囲からの二次被害】

被害者遺族にとってどのようなことが二次被害となるか、具体的に語られています。

✓ 遺族に対する近隣からの二次被害

「よく僕も人の前で話させてもらうときは、最後は、昨日まで一般市民で普通に生活してた人が犯罪被害者になったっていうだけなんだから、偏見持たないで、以前と同じように接してください。ただ、変に慰めるのは駄目ですよっていう、そういうことは言ってるんですけどね。だから、何ていったらいいのかな。例えば、…妻が犬の散歩に行ったときに、それまで犬の散歩で会ってた奥さんと会ったら、その人が犬を連れてなかったと。(妻が)「あれ? ワンちゃんどうしたの?」って聞いたら、「うん、うちの子、亡くなっちゃったの。でも、安らかな死に顔で私は安心してんだけど、あんたのお嬢さんどうだったの?」って聞かれて、一瞬、え? 何のこと? って思ってたときとしたいんだけど、「いや、うん、まあ」って言って言葉を濁して別れて帰ってきたとか。それとか、たまたま知り合いに道で会って、あいさつするときに、少しほほ笑みながら「こんにちは」とかってあいさつしたら、「あ、もう笑えるようになったのね。大丈夫ね」って肩をトントンとたたいて、すっと思っちゃったとか、そういう何気ない一言、一つの動作。すごくショックだったみたいですね。」(P1)

✓ ある人の「おせっかい」によって、親戚や友人から妻への電話が途絶えた。

「僕自身というよりも、これは妻が感じたっていうことが大きいんですけども、一つは、結構、うちの妻が電話でもって親戚のおばさんとか友達とかと話すことが好きで、しょっちゅう電話をしてたんですよね。それが事件後、周りからの電話がぴたっとなくなるんですよね。後で聞いたんですけども、ある一人のおせっかいのおばさんが、親戚じゅうに、〇〇(遺族)のところに電話しないで。今大変なんだから。何か聞きたいことがあったらみんな自分のところに連絡してくれれば、私が代表して聞くから、直接電話しちゃ駄目だっていうかん口令を敷いたらしいんですよね。

だから、余計妻としては、私はもう親戚じゅうから無視されてるじゃないけども、そんな感じで、何とも思ってもらえてないんだっていう、孤立感っていうか、寂しさっていうか、それはあったみたいです。自分の友達付き合いしてた人なんかにも全く連絡が来ない。後でちらっと聞いたところによると、今は大変だからそっとしておこう。落ち着いたら連絡しよう。落ち着いたらって、落ち着くことなんかないんですよね。」(P1)